紫式部日記

安川定男編

桜楓社

紫式部日

安川定男編

桜楓社出版

昭和三十五年五月二十五日 印刷
昭和三十五年五月三十日 発行

紫式部日記

定価 一七〇円

編者 安川定男
発行者 南雲正朗
印刷者 神谷秀雄
発行所 桜楓社出版
東京都千代田区西神田二の二九

発売元 南雲堂出版株式会社
東京都千代田区西神田二の二九
電話九段(331)八二三六—九

神谷印刷 神谷製本

凡例

一、本書は大学教養課程用の教科書として、また教養として古典に接したいという人人のために編纂したもので、紫式部日記の全文を収めた。

一、底本には群書類従本を用いたが、本文として不穏当と思われる部分は、紫式部日記絵詞、天和本紫式部日記（岩波文庫本）等により適宜補訂した。これは本書の編纂の趣旨からみて、なるべく文意の通り易く、かつ文法的にも誤りの少ない本文とすることが適当と考えたからである。補訂した箇所は、一一＊印を附し、上欄にその拠る所を示した。

一、漢字と仮名との配合、送り仮名、仮名づかい、句読点は、本書の目的を考慮して、適宜底本のそれを改訂し、読みにくい語にはふり仮名を附し、一般の人々にも読み易いように心がけた。

一、段落は文脈を考慮して新しくきり、話題が大きく変る毎に、一行の間隔を設けた。

一、頭注には、人物、官位、衣服、調度、行事、引歌等の解説、および難解と思われる語句の註解を施して、

教授と読解の便をはかつたが、語句の註解は、教科書としてはやや詳細にすぎる結果になつたきらいがある。しかしこれは、初学者および一般読者のためを慮つて、余白の許す限り詳細を心がけたためである。

一、本書の不備、誤謬に関しては、おおかたの御教示を賜わりたい。

昭和三十五年三月

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寛弘五年七月中旬

一秋らしくなるにつれて。

二藤原道長の邸宅。一条天皇中宮彰子（道長の長女）が御産のため七月十六日からここに移っていた。

三寝殿のわきを通って池に流れ入る細い流れ。

四めいめいそれぞれに。

五空一たいも艶に美しいのに引き立てられて。

六僧侶が輪番で間断なく御経を読むこと。ここでは安産祈願のため。

七遣水の流れる音の響き。

八（秋風にも）まぎれず聞えてくる。

九中宮彰子。

一〇懐妊のために気分がすぐれない。

*一給へる御有様一と下に続けている本もある。

一一中宮の御様子のすぐれておられることは申すまでもないことだが。

一二平常の心境とはうってかわって。

一秋のけはひの立つままに、二土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、三遣水のほとりの草むら、四おのがじし色づきわたりつつ、五おほかたの空も艶なるにもてはやされて、六不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ七水の音なむ、夜もすがら聞八きまがはざる。

九御前にも、近うさぶらふ人々はかなき物語するをきこしめしつつ、一〇なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ*給へり。一二御有様などのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、一三うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき。

まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まゐりなばや。女官はいまださぶらはじ。蔵人まゐれ」などいひしろふほどに、後夜の鐘うちおどろかし、五檀の御修法、時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしくたふとし。観音院の僧正、ひんがしの対より、二十人の伴僧をひきゐて御加持まゐり給ふ足おと、渡殿の橋のとどろとどろと踏みならさるるさへぞ、*ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場のおとど、へんちじの僧都は文殿などに、うちつれたる浄衣すがたまで、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間をわけてかへりいるほども、はるかに見やらるるこちしてあはれなり。**さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。人々まゐりつれば夜もあけぬ。

一上げるにも、おろすにもいうが、ここではあげること。
二内侍・命婦・女蔵人等の女房より身分の低い官女。
三女蔵人。装束裁縫等の雑事を掌る女官。「まゐれ」は「御格子まゐれ」の意。
四六時（晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜）の勤行の一。それを知らせる鐘を鳴らすのである。
五五大明王を中央と東西南北の五壇に請じて行う祈禱。
六定刻になつて祈禱を始めた。
七おもおもしくひびいて。
八勝算。観音院は京都府愛宕郡北岩倉の大雲寺にあつた。
*「ことどころ」の誤写か。
九馬場にある殿舎。
一〇御産部類記などによれば浄土寺座主、明救僧都。
一一書庫兼学問所。馬場殿とともに僧の休息所にあてた。
一二修法の時に着る僧衣。
*「にて」の誤りか。
**「さいき」の誤り。斎祇。
修学院の僧都。藤原道綱の子
一三五壇の西壇の大威徳明王

一寝殿と東の対とをつなぐ渡廊下。作者の局（居室）は、東の対から渡殿に出る戸口にあつたと思われる。
二道長。当時四三才。
三摂関大臣等の外出時に扈従する本府随身と、摂関が身近かに召使う内舎人随身の二種あり、ここは後者。
四図版参照。
五こちらが恥かしくなるくらい立派な様子。
六朝起きたまま化粧をしていない顔。
七かこつけて。
八女郎花の盛りの色を見ると露が分けへだてをしたわが身の醜さが思い知られる。
九白露は分けへだてなどはすまい。女郎花が美しい色に染まるのは、自分から美しくなろうと心がけるからだろう。
一〇作者の同僚。藤原道綱女、讃岐守大江清通妻、豊子。
一一道長の長男、頼通。当時十七才。
一二おとならしく。

一渡殿の戸ぐちの局に見いだせば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、二殿ありかせ給ひて、三御随身召して遣水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花のいみじうさかりなるを、一枝折らせ給ひて、四几帳のかみよりさしのぞかせ給へり。五御さまのいとはづかしげなるに、六わが朝がほの思ひしられば、「これおそくてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、七硯のもとによりぬ。

八をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそしられ

「あな疾」とほほゑみて、硯めしいづ。

九しら露はわきてもおかじをみなへし心からにや色のそむらむ

しめやかなる夕暮に、一〇宰相の君とふたり、物語してゐたるに、一一殿の三位の君、すだれのつま引きあげてゐ給ふ。年のほどよりはいとおとなしく、一二

一奥ゆかしい様子。
二人はやはり心の持ちかたを立派に保つことがいちばんむつかしいものようだ。
三あまり馴れ馴れしくならない程度に話を切上げて。
四古今集、秋上、小野良材「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」
五この当時、藤原行成が播磨守、藤原有国が播磨権守。前者か。
六負けた者が勝つた側の者を饗応すること。
七ついちよつと。
八御馳走をのせる台。
九台の脚。
一〇御盤の面に洲や浜辺の景色を石や砂で作つた飾物。その水際の所に葦手書に歌をかきまぜたのであろう。
一一「心あてに白良の浜に拾ふ石の巌とならむ世をしこそ待つ」を本歌としている。
一二和歌山県西牟婁郡湯崎附近の海岸。
一三「碁の石」をかけてある。

一心にくきさまもて、「二人はなほ心ばへこそかたきものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなしと人のあなづりきこゆるこそあしけれと、はづかしげに見ゆ。三うちとけぬほどにて、「四おほかる野べに」と、うち誦んじて立ち給ひにしさまこそ、物語にほめたる男のここちし侍りしか。

かばかりのことの、うち思ひいでらるるもあり、そのをりはをかしきことの、過ぎぬれば忘るるもあるは、いかなるぞ。

五播磨守、碁のまけわざしける日、七あからさまにまかでて、後にぞ八御盤のさまなど見給へしかば、九華足などゆゑゆゑしくして、一〇洲浜のほとりの水に、かきまぜたり。

一一紀の国のしららの浜にひろふてふこの一三石こそはいはほともなれ

扇どものをかしきを、その頃は人々持たり。

八月二十日あまりのほどよりは、一上達部、二殿上人ども、三さるべきはみな宿直がちにて、四階の上、五対の簀子などに、みなうたたねをしつつ、はかなうあそびあかす。琴、笛などにはたどたどしきわかうどたちの、*とねあらそひ、今様歌どもも、所につけてはをかしかりけり。六宮の大夫斉信、七左の宰相の中将経房、八兵衛の督、九美濃の少将済政などしてあそび給ふ夜もあり。一〇わざとの御あそびは、一一殿おぼすやうやあらむ、せさせ給はず。年ごろ一二里居したる人々の、一三なかだえを思ひおこしつつ、まゐりつどふけはひ、さわがしうて、その頃は、しめやかなることなし。

二十六日、一四御薫物あはせはてて、人々にもくばらせ給ふ。まろがしゐた

一公卿。官は参議以上、位は三位以上の廷臣。参議は四位も。二昇殿を許された者をいい、四位・五位の人、および六位の蔵人を含む。
三中宮御産に際して公私につけて関係が深く、宿直するのが当然の人たち。
四庭に下る階段の上にあたる縁のところ。
五対の屋の簀子の縁。
*「とね」は「と（読）経」の誤写であろう。経文を読んでその声調のよさを争うこと。
六中宮大夫、藤原斉信。
七参議兼左近衛中将、源経房。
八藤原懐平。
九源済政。道長の妻倫子の甥。
一〇表立った管絃のあそび。
一一女房が実家に退いていること。
一二長く無沙汰していたこと。
一三八月二十六日。
一四煉香。種々の香料の粉末を調合し、ねりまるめて作る。そこで「あはせ」とか「まろがし」とかいう。

る人々あまたつどひゐたり。一上よりおるる道に、二辨の宰相の君の戸ぐちをさしのぞきたれば、ひるねし給へるほどなりけり。三萩、紫苑、いろいろの衣に、四濃きがうちめ心ことなるを上に着て、顔は引きいれて、硯の筥に枕してふし給へるひたひつき、いとらうたげになまめかし。絵にかきたる物五の姫君のここちすれば、六口おほひを引きやりて、「物語の女のここちもし給へるかな」といふに、見あげて、「ものぐるほしの御さまや。ねたる人を、七心なく八おどろかすものか」とて、すこし起きあがり給へる顔のうち赤み給へるなど、九こまかにをかしうこそ侍りしか。おほかたもよき人の、折からに、またこよなくまさるわざなりけり。

九日、一〇菊の綿を、兵部のおもとのもてきて、「これ、一一殿のうへの、とりわきて、いとよう老のごひすて給へと、のたまはせつる」とあれば、

一中宮の御座所から自分の局におりる途中で。
二前出の宰相の君に同じ。
三重ねの色目。萩は表が蘇芳、裏が青。紫苑は表が薄紫、裏が青。
四濃い紅の、砧で打つて出した光沢の特別いい衣を。
五物語に出てくる姫君。
六口にかぶさつている衣。
七思いやりなく。
八目をさまさせる。
九かわいらしく美しかつた。
一〇菊の花にかぶせて、その香をしませた綿。九月九日の重陽の節句に、これで身体をぬぐうと老が去ると考えられていた。
一一道長の正室、倫子。源雅信の女。中宮彰子の母。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一私はいただいた菊の露にちよつと若がえる程度に袖をふれるにとどめて、千年の齢は花のあるじであるあなたさまに御譲り申しましよう。家集、新勅撰などに第三句「袖ふれて」とあるのによつて解く。二殿の上が自室に。三歌をおくるのも無用と思つて。四作者の同僚で、最も親交の深かつた人。源雅信の四男、扶義の女。五同じく作者と親しかつた同僚。扶義女、簾子（但し、扶義の弟、時通の女とも、時通女、扶義養女ともいわれる）。源則理に嫁して後別れ、中宮に出仕、道長の思い人となつた。六香炉。七先日調整された煉香。八紅葉するのが待ち遠しい。九御加持をなさる時刻でもある。一〇御前を引き下つた。一一御部屋の調度や衣裳等が御産所の設備に変る。白一色にするのが例。

一菊の露わかゆばかりに袖ぬれて花のあるじに千代はゆづらむ

とて、返し奉らむとするほどに、「二あなたにかへりわたらせ給ひぬ」とあれば、三ようなさにとどめつ。

その夜さり、御前にまゐりたれば、月をかしきほどにて、はしに、御簾の下より裳のすそなどほころびいづるほどほどに、四小少将の君、五大納言の君などさぶらひ給ふ。六御火取に、七ひと日の薫物とうでて、こころみさせ給ふ。御前の有様のをかしさ、八蔦の色の心もとなきなど、口々きこえさするに、例よりもなやましき御けしきにおはしませば、九御加持どももまゐるかたなり、さわがしきここちして入りぬ。一〇人の呼べば、局におりて、しばしと思ひしかど寝にけり。夜なかばかりより、さわぎたちてののしる。

十日の、まだほのぼのとするに、二御しつらひかはる。白き御帳にうつら

せ給ふ。殿よりはじめ奉りて、一公達、四位五位ども、おほくさわぎて、二御帳の帷子かけ、三御座どももてちがふほど、いとさわがし。日ひと日、いと心もとなげに、四おきふし暮らさせ給ひつ。五御もののけどもかりうつし、かぎりなくさわぎののしる。六月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をばさらにもいはず、山々寺々を尋ねて、七験者といふかぎりは残るなくまゐりつどひ、三世の仏も、いかにか聞き給ふらむと思ひやらる。八陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も耳ふり立てぬはあらじと見えきこゆ。九御誦経の使、立ちさわぎ暮らし、その夜もあけぬ。

御帳のひんがしおもては、一〇うちの女房まゐりつどひてさぶらふ。西には、御もののけうつりたる人々、一一御屏風一二よろひを一三ひきつぼね、つぼねぐちには几帳を立てつつ、一三験者あづかりあづかりののしりゐたり。南には、やむごとなき僧正、僧都かさなりゐて、一四不動尊の生き給へるかたちをも呼

一摂政関白大臣公卿らの子息をいう。
二御帳台。貴人の休息所や寝所にする。
三たれぎぬ。
四御帳台の敷物やしとね。
五死霊、生霊など、人の肉体的精神的弱り目に乗じてとりついて苦しめるつき物。これを除くには祈禱によって他の人（よりまし）にかり移して調伏する。
六大ぜい。
七物怪調伏のため加持祈禱をする行者。修験者。
八陰陽寮に属し、神を祭つて卜筮・相地・呪詛・清祓等を掌つた。オンミョウジとよむ
九誦経を寺々に頼む使。
一〇主上づきの女房。
一一雙。一対。
一二ぐるりと立てまわし、囲いを作つて、その入口に。
一三物のけの移つたよりましを一人々々分担して。
一四五大明王の一で、五壇の中央に請じてある。

一後世の襖（ふすま）障子。
二容易には坐りこめない。「なかなか」は「中に」の誤写と見る説もある。
三どこに行っているのか分らない。傍註本などに「ゆづらむかた」とあるのに従えば、場所を譲ってあけようにもできないの意となる。
四泣き惑うのが当然な古参の女房。
五柱と柱との間を間（ま）という。
六寝殿造の中央を母屋（もや）といい、その外郭が廂、そのまた外側が簀子である。
七観音院僧正勝算（前出）。
＊「ちやうてふ」の誤写で興福寺別当定澄のことか。
八諸大寺の庶務を総べる僧職。東寺の一の長者が任ぜられる。ここでは済信。源雅信三男。
九法性寺座主。後に天台座主。道長の信任が篤かった。

びいであらはしつべう、頼みみ恨みみ、声みなかれわたりにたる、いといみじう聞こゆ。北の御障子（さうじ）と御帳とのはざま、いとせばきほどに、四十余人ぞ、後にかぞふればゐたりける。いささかみじろぎもせられず、気（け）あがりて、ものぞおぼえぬや。いま、里よりまゐる人々は、なかなかゐ籠（こ）められず、裳（も）のすそ、衣（きぬ）の袖、ゆくらむかたも知らず。[四]さるべきおとななどは、しのびて泣きまどふ。

十一日の暁に、北の御障子、[五]二間（ふたま）はなちて、[六]廂（ひさし）にうつらせ給ふ。御簾（みす）などもかけあへねば、御几帳（みきちやう）をおしかさねておはします。[七]僧正、＊きやうてふ[八]僧都、法務僧都などさぶらひて加持まゐり、[九]院源僧都、きのふ書かせ給ひし御願書（ごくわんしよ）に、いみじきことども書き加へて、読みあげ続けたる言の葉の、あはれにたふとく頼もしげなることかぎりなきに、殿のうちそへて仏念（ほとけ）じ

きこえ給ふほどの頼もしく、[一]さりともとは思ひながら、いみじうかなしきに、人々涙をえほしあへず、「[二]ゆゆしう、かう」など、かたみにいひながらぞ、えせきあへざりける。

人げおほくこみては、いとど御ここちも苦しうおはしますらむとて、[三]南東おもてに出ださせ給うて、さるべきかぎり、この二間のもとにはさぶらふ。殿のうへ、*讃岐と宰相の君、[四]内蔵の命婦、御几帳のうちに、[五]仁和寺の僧都の君、[六]三井寺の内供の君も召し入れたり。殿のよろづにののしらせ給ふ御声に、僧もけたれて音せぬやうなり。いま一座にゐたる人々、大納言の君、小少将の君、[七]宮の内侍、[八]辨の内侍、[九]中務の君、[一〇]大輔の命婦、大式部のおもと、[一一]殿の宣旨よ。いと年経たる人々のかぎりにて、心をまどはしたるけしきどものいとことわりなるに、まだ見奉りなるるほどなけれど、たぐひなくいみじと、心ひとつにおぼゆ。

一こんなに物のけが強くてもまさかのことはあるまいとは思いながら。
二縁起が悪い、おめでたい席でこんなに泣いたりして。
三女房たちを。
*「讃岐の」の誤り。前出。
四伊勢斎主輔親の妻。藤原教通の乳母。
五済信。前出の法務僧都と同人。
六永円。致平親王（村上皇子）男。母、源雅信女。済信の甥に当る。
七橘良芸子。もと冷泉院に仕えて辨の命婦とよばれていた人。
八藤原義子。源扶義の後妻となつたが死別し、掌侍として出仕した。
九若狭守平祐之女。花山院の乳母子。院の寵を受け、皇子女を生んだ。
一〇越前守大江景理の妻。
一一大式部のおもとは道長の宣旨であるの意。宣旨はもと天皇の言葉を蔵人に伝える宮中の女官をいうが、後には関白家にもおかれた。

一内侍のかみ（道長の第二女藤原妍子。一五歳）の乳母。二道長第三女、威子。一〇歳。三道長第四女、嬉子。一二歳。四美作介藤原泰通の妻。嬉子の乳母。五藤原兼隆。道兼の男。二四歳。参議で右近衛中将。六源雅通。時通（雅信男）の男。蔵人、右近衛少将。七いつもはあまり親しくしてない人々までが。八泣きはらした目を見られるが、その恥かしさもまるで念頭になかった。九散米。邪気を払うためにまく米。一〇混雑の中でくしゃくしゃになった衣。一一中宮は安産祈願のため頭髪を剃って受戒し仏弟子になるのである。但し形だけの剃髪。一二受戒の作法をいう。一三無事に御産をなさって。一四後産のまだすまない間。

また、このうしろのきはに立てたる几帳の外に、内侍のかみのめのと、姫君の少納言のめのと、いと姫君の小式部のめのとなどおし入り来て、御帳ふたつがうしろのほそみちを、え人もとほらず、行きちがひみじろぐ人々は、その顔なども見わかれず。殿の公達、宰相の中将兼隆、四位の少将雅通などをばさらにもいはず、左の宰相の中将経房、宮の大夫など、例はけどほき人々さへ、御几帳のかみより、ともすればのぞきつつ、はれたる目どもを見ゆるも、よろづ恥わすれたり。いただきには、うちまきの雪のやうに降りかかり、おししぼみたる衣のいかに見ぐるしかりけむと、のちにぞをかしき。

御いただきの御髪おろし奉り、御いむこと受けさせ奉り給ふほど、くれまどひたるここちに、こはいかなることと、あさましうかなしきに、たひらかにせさせ給ひて、後のことまだしきほど、さばかりひろき母屋、南の

一簀子のへりにめぐらしたてすり。図版参照。
二いま一度声を張り上げて経を読みたて、額を床につけて礼拝する。
三中宮附の女房の一人。
四源頼定。為平親王の男。三二歳。蔵人頭、左近衛中将。
五小中将の君は化粧などをいつもちやんとしている美しい人で。
六まして自分の顔は。
七幸いであつた。
八よりましに移された物のけが、くやしがつてさわぐ声。九源の蔵人、兵衛の蔵人、右近の蔵人、宮の内侍は、よりましの役をつとめた女房。これらを心誉阿闍梨以下の僧にあずけて物のけを調伏せしめたのである。
一〇左衛門佐藤原重輔の男。
一一未詳。僧名か。
一二尋覚。藤原為光男。
一三未詳。僧名か。
一四権少僧都智辨の弟子。円明寺検校。

廂、勾欄のほどまでたちこみたる僧も俗も、いま一よりとよみて額をつく。

ひんがしおもてなる人々は、殿上人にまじりたるやうにて、小中将の君の、左の頭の中将に見あはせてあきれたりしさまを、のちにぞ人々いひいでて笑ふ。けさうなどのたゆみなく、なまめかしき人にて、暁に顔つくりしたりけるを、泣きはれ、涙にところどころぬれそこなはれて、あさましう、その人となむ見えざりし。宰相の君の顔がはりし給へるさまなどこそいとめづらかに侍りしか。まして、いかなりけむ。されど、そのきはに見し人の有様の、かたみにおぼえざりしなむ、かしこかりし。

今とせさせ給ふほど、御もののけのねたみののしる声などの、むくつけさよ。源の蔵人には心誉阿闍梨、兵衛の蔵人にはそうそといふ人、右近の蔵人には法住寺の律師、宮の内侍のつぼねにはちそう阿闍梨をあづけたれば、もののけにひきたふされて、いといとほしかりければ、念覚阿闍梨を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com